東アジア茶文化比較研究

― 日本と台湾の交流と影響 ―

柯　一薫

1．はじめに

人類が最初にお茶を利用したのは，中国の西南の果て，雲南というところであった。茶の湯の源流は，中国の唐代の陸羽およびその時代の文化人たちに求められる。日本では，この中国の喫茶の風俗を受け継いで，千利休に至り日本の茶道が大成した。一方，台湾では1970年代以降に文化，芸術が重視される風潮が高まり，中国から伝来された茶文化を基礎に変化して，独特な台湾茶芸文化が成立してきた。その後，1980年代から中，台の茶文化は公式な交流を展開するようになる。今日，茶芸は台湾式の飲茶法のことだけではなく，中，台の二つの地域において新しく融和しつつある茶文化となっている。

本研究の大きな目標は，現代東アジアの茶文化像を解明することである。以下の理由により，日本，中国，台湾，この三つの国と地域を比較研究することが有効であると考えている。まず，これまでの日本の茶道や台湾の茶芸についての研究とは異なり，東アジア全体を視野に入れた比較文化の視点を取る必要がある。日本の茶道や台湾の茶文化が中国をルーツとして発展してきたことは周知の事実である。したがって，茶文化について，中国から始まって日本や台湾においてどのように歴史的に発展してきたのかを理解する必要があると考えられる。その上で，日本，中国，台湾という三つの地域における茶文化の共通性と相互影響の歴史がとりわけ重要であるだろう。高橋（2000）は，中国の茶文化は純粋に外国の文化として研究し，その後日本との比較を行うべきであると指摘

した。しかし，漢字の受容や植民統治期の経験などからは，相互影響の可能性が見えてくる。そのような相互影響は，現在の茶道や茶芸における作法や茶道具にも顕著に現れている。

本稿では，日本の茶道や台湾の茶芸についてそれぞれ単独に扱うのではなく，歴史や作法について比較する視点が有効であると主張する。その上で特に，台湾における茶道の歴史的な影響及び交流を例として取り上げて議論を行う。台湾の茶芸が日本占領期の茶道の影響を色濃く受け継いでいることが示されることで，相互影響という観点の重要性が示唆されるだろう。

全体の構成は次の通りである。第２節では先行研究を整理し，その問題点を指摘する。そして，日・中・台間の茶文化相互関係を概略的に示したうえで，本稿の研究範囲について説明する。第３節では，日本占領期の台湾における茶産業の概況と，茶文化の発展状態を分析する。その結果を踏まえて第４節では，茶道具を取り上げて日本の影響のもとでいかに台湾の茶文化が形成されたかを考察する。さらに茶事に現れた思想面から日本，台湾の共通性を主張する。そして最後に全体の議論をまとめる。

２．これまでの茶道・茶芸研究と本稿の立場

これまでの茶道や茶芸についての先行研究を振り返ると，それぞれの国を超えた総合性や比較文化の視点が十分ではなかった点を問うことができる。以下では，まず茶道と茶芸における先行研究を述べ，それぞれの問題点を考察する。

（１）日本

日本の茶道研究については，次のような問題点を指摘することができる。岡倉天心による『茶の本』は，アジアの思想や文明を茶道によって西洋に紹介する先駆的な業績であり，日本の茶道史上重要な役割を果た

した（岡倉 1983,1998）。確かに，この著作は研究法として日本の茶道を体系的に解明する成功をおさめるが，そこでの「アジアの思想」とは，日本を中心とする思想に限られたものであった（高橋 2000）。

その後，建築学，美術史学，歴史学，宗教学などの分野で多くの茶道論が展開されてきた。例えば，千玄室（2003）のように，茶を飲むことと茶を喫することとを区別し，家元制度を背景とした文化的な定義が提出されてきた。しかし，早くも熊倉（1978）においては，茶道史研究について，次のような批判がなされている。まず，既存の茶道研究自体は学問的業績としての意義に乏しい。その理由は，それらの研究が岡倉の思想を一般的に継承するもので，批判性を欠いてきたことにある。結果として茶道研究は各分野に拡散してしまう傾向にあり，茶道研究のそもそもの範囲に対する認識が改めて問い直されることはなかった。

（２）台湾と中国

他方で，中国や台湾における茶芸は，日本や台湾の茶芸研究によれば，次のようなものとして理解されてきた。

日本においては，確かに中国は茶のルーツとして扱われてきたが，宋代以後の茶文化は無視されがちであった。経済史的な部分以外に，中国の茶史や茶文化そのものを研究対象とするという発想は少ない（高橋 2000）。また日本では，台湾地域も含めた中国飲茶法と日本茶道の比較研究が十分になされてこなかった。中国の茶を研究する意味として，日本の茶文化のルーツ解明という側面を強調しがちであり，そのため，日本の茶文化を見慣れた目から中国の茶を推測する傾向がよく見られた（同上）。

台湾では，茶芸研究はかなりの蓄積を見せてきている。もっとも，台湾や中国の茶文化について，「茶芸」として研究されるようになったのはつい最近のことである。「茶芸学」という言葉が初めて用いられたのは，2002年に范増平が発表した『茶芸学』という試論であったとされる（范

2002)。それまで中国茶は薬用としても飲み物としても長い歴史があったが，植物学，漢方医学，文学，美学などさまざまな分野から研究され，中国茶文化の範囲は曖昧にとらえられてきた。それに加えて，台湾の茶芸については日本の茶道に左右されたという背景があり，それまで明確な定義がされてこなかった。

茶芸研究者の張宏庸は，台湾の茶人のもつ茶芸に対する理念を生活芸術としてとらえ，４つの着目点と，３つの分析レベルを提示している(張2002:9)。４つの着目点とは，第１に生活芸術の地域と言語系統，第２に生活芸術における本質的な一貫性と階層の多元化，第３に各種の生活芸術の間の関連性，そして第４に生活芸術とほかの学問との関係である。３つの分析レベルとは，第一層として地域生活芸術レベル，第二層として国家生活芸術レベル，第三層として比較生活芸術レベルである。張はこの三つのレベルを貫く形で，多様性，普遍性，芸術性という茶芸の三つの特徴を指摘している。

現代中国には，中国の茶文化については膨大な研究蓄積が存在しているが，やはり産業面に目を向けた研究が中心であり，現代の茶文化に関する研究は多いとは言えない。『東洋の茶―茶道学大系』の巻末に付した『中国茶研究文献目録』を参照すると，次のような研究分野が存在することがわかる。(高橋 2009ｂ：421－432)

「叢書」：茶に関する叢書形式の出版物

「辞典」,「百科」：茶に関する辞典，事典及び茶全般に関する百科，便覧に類するもの。

「総合」：茶（主に茶文化，喫茶法など）に関する概説書。

「資料・総合」：茶に関する資料（民間故事，飲食なども含む）

「資料・茶書」：伝統的な茶書を中心とした資料集。あるいは茶書の注釈，解題。

「論集」：茶に関する論文集

「茶史・通史／断代／地域」：茶に関する歴史的なもの

「茶品」：名茶を紹介したもの
「茶具」：茶具一般にかんするもの

ここにおいては，次のような特徴と限界を指摘することができる。まず茶業界（茶樹栽培，製茶，茶業経済）が研究の中心になっており，茶文化に関する研究は多いとは言えない。また茶文化について触れる場合も，中国の唐，宋，明，清時代を主として論述されることが多い。タイトルとしては「中国茶文化」,「中国茶道」,「中国茶事」などがあり，固定的な用語はない。「茶芸」という言葉がまだ一般的に定着しておらず，今日の中国，台湾の茶文化の発展状況を十分に反映してないと考えられる。

以上の先行研究を総合すると，ほとんどが一つの地域，文化を対象として研究を行い，比較の視点を欠いてきたことがわかる。つまり，現在東アジアの茶文化を論じる場合には日本，中国，台湾における茶文化は完全にお互いに独立の文化として扱われる傾向が強かった。

しかし，台湾の茶芸は，中国大陸から伝来したものだけに影響されたわけではない。日本占領時期（1895－1945）に日本の政府は台湾で計画的に茶産業を広げたし，日台間でお茶に関する商業的，文化的な往来は歴史的に盛んであったため，日本の茶文化が台湾茶文化に影響してきたことも重要である。したがって一つの文化を理解する上で，それを関連地域との相互影響のもとに比較・探究することによって，より完成度の高い結論が得られると考えられる。

また，先行研究においては大量の史料や書籍を用いた分析がなされてきたが，今日の東アジアにおける茶文化の状況が現時点では十分に解明されていない。熊倉（1978）に指摘されたように，実態と研究を一体として把握することができなければ，今後の茶文化の継承にも深刻な問題を及ぼしうると思われる。

次節以降では，以上のような問題意識に基づき，特に台湾の茶芸について日本の茶道との比較対照を試みる。その前に，まず日，中，台間の茶文化関係についての全体的イメージを簡潔に確認しておこう。図１は，日本，中国，台湾において茶文化がいかに交流し，発展してきたかについて，時系列にそって大まかに図式化したものである。図中，下から上への縦の矢印は時間の流れを，横の矢印は相互の交流や影響を表すものである。台湾はもともと中国の領地であったが，日清戦争で下関条約が結ばれたことによって日本占領下に置かれ，第二次世界大戦以後に中国国民党支配に下で独立地域となったことは周知の事実である。

茶は中国を起源とする。ほぼ三千年前の中国の周代には，茶はただの野生の植物ではないと認識されており，飲み物，薬として使われるようになった。おそらく二千年前ころから，喫茶風俗が形成されてきたとさ

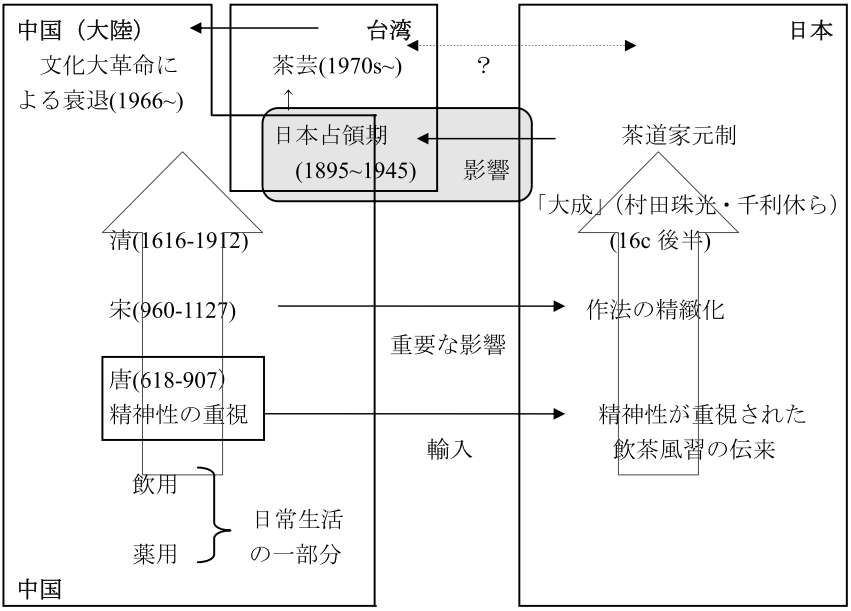

図１．日・中・台間における茶文化相互関係の歴史

れている。その後，唐代まで中国の茶文化は貴族，上層社会に属した風俗であった。唐代になると，陸羽が『茶経』（758年）を記し，茶の湯はその時代の文化人たちによって求められた。お茶が一大文化となったのはこの唐代の八世紀であったと言えよう。

この陸羽が初めて茶について体系的に論じた唐代には「炙茶法」が盛んであり，宋代にも続けられていた[(1)]。明代から茶葉を使うようになり，これは「江南茶」（茶葉が用いられ，「洗茶法」，「温潤泡」，「投茶法」という３つの法則に基づいた点て方）と言われるものである[(2)]。清代になると「工夫茶」[(3)]が盛んになり近代まで続けられた。しかし1949年中華人民共和国が成立し，1966年に文化大革命が着手されると，中国における茶文化は次第に衰退してきた。その一方で1970，80年代になると，経済改革，対外開放の推進によって，台湾の茶芸が正式に導入されることになった。

日本には，今から約七百年前の鎌倉時代の初期に禅宗を学習するため栄西禅師が浙江省の天台山へ赴き修行した際に，茶文化が伝来したとされる。栄西禅師のいた浙江省はちょうど緑茶生産が盛んな場所であった。そのために，日本には緑茶しか伝わらなかったと考えられている。栄西禅師以前にも喫茶の風俗は日本に伝わっていたが，中国と同じように一部の貴族や僧侶の趣味として扱われたため，それほど広がらなかった。栄西禅師以後のお茶は禅宗と武家社会に結びついてだんだん広がっていった。この中国の飲茶の風俗が受け継がれて，村田珠光，武野紹鴎，千利休に至り，茶の湯がわび茶として大きく成長，変化したのである。その変化を最も象徴的に表現しているのは茶室のあり方である。わび茶の初期には，茶室というものはなかった。茶の湯がだんだん盛んになるなかで，茶室という独自の建物の形式が定着したのである。わび茶は珠光から紹鴎，利休へと，深められてきた。ここにおいて茶道が大成したといえるのである。

その伝統をふまえた「家元」という言葉は，享保３年（1718），茶道藪

内流の五代目竹心の書に記されたのが初見である。家元という呼び名自体は江戸時代以降のことなのだが，家元の実体は早く，平安時代に成立していた[4]。利休の子孫が表千家・裏千家・武者小路千家の三家に分かれて今日に伝わり，その他の門流も多い。家元は自分の流派の芸道を守り，弟子からまたその弟子へと代々受け継がせていくものである。こうした歴史的な流れにしたがって融合された茶道の精神は，岡倉天心が1906年に発表した『茶の本』によって世界に伝えられた。アジアの思想として茶道を西洋世界に紹介した『茶の本』には，大きな意味があった。

一方，台湾では，文化，芸術が重視される風潮によって，1970年代以降に中国から伝来された茶文化を基礎に変化してきたが，1977年に当時の中国民族学会理事長であった婁子匡により台湾茶文化を表す「茶芸」という専門用語が発表され，以後，この用語が定着した。それによって，独特な台湾茶芸文化が成立したとされる。

以下の本稿では，図１の網掛け部分である「台湾の日本占領期」における茶文化像を中心に論じる。台湾の日本占領期をとりあげる理由は以下の３点である。

１つ目に，台湾の茶文化は日本と同じく中国から伝来されたものだという点である。589年，中国の隋朝時代から台湾と中国との交通往来が始まっていたこと，および台湾住民には福建，広東という飲茶風俗が盛興であった地域の出身者が多いという事実から判断すると，台湾にはもともと飲茶風俗，製茶，栽培技術などを，隋朝以降中国から渡来した人々を通じて伝来してきたと考えることが可能であろう。

２つ目に，中国における茶文化の没落と台湾から逆輸入された点である。1949年中国に成立した中国共産党のもとに，物質不足で飲茶風俗はだんだん没落していった。さらに，1966年の文化大革命時期に，飲茶風俗は一度中断してしまったのである。80年代に中国は台湾から茶芸が逆輸入されて，清朝の時代に形成された工夫茶と結びついて娯楽性が高い茶文化が発展してきた。そのため，現代中国の茶の湯を論ずる場合も，

台湾の茶芸から探求することが必須となっているのである。

３つ目に，これが以下の分析の主な焦点となるのだが，日本との影響と交流が盛んであった点である。1895～1945年間の日本占領期になると，日本と台湾の間で多くの交流が行われた。台湾におけるお茶の作法，茶器，思想などは日本から影響を受けていた。近年，日本においても台湾茶芸が紹介され広がり始めており，日本の伝統的な茶道儀式をもちながら茶文化を新しい形として民衆の生活との繋がりを深くしようとする動きがある。このように両国間の交流は非常に盛んである。

以上述べたように，東アジアの茶文化において台湾は融和，革新の役割を果たしてきたと言える。特に日本占領期の台湾茶文化を解明することによって，現代東アジアの茶文化を理解する一歩となると考えられる。

３．日本占領期の台湾における茶文化の形成

本節では，台湾における茶文化が，中国から継承した茶文化を持ちながら日本との交流，影響を受け，どのように発展したのかを考察する。考察は，２つの点について行う。第１に，日本占領期の茶業背景を整理する。当該時期の茶産業の動きは，日本政府によって主導された政策に関連するものである。お茶に関して日本占領政府の焦点はどこにあったのか，どのような調査を実施したのかを整理することで，当該時期の茶産業の状況がわかるであろう。第２に，その結果を踏まえて，台湾における茶文化の発展について分析する。茶文化には紅茶，花茶，煎茶，抹茶などが全て含まれうるが，文化的な発展と言う意味では，当該時期には日本の茶道流派が伝来し，茶道の作法，精神などが紹介された事実が明らかになる。このような歴史・社会分析は，次節において日本と台湾の茶道具や茶文化思想を比較する上での下地となりうるものである。

（１）茶産業の発達

日本占領期の台湾における茶産業の発展は，1869年に規定された製茶

税，茶園税，茶葉輸出税，出港税（港を通じて茶葉を輸出することに対してかけられた税金）などの停止に始まった。このような茶税緩和政策は，1910年まで続いた。

茶産業が隆盛するにともなって，研究機関も設立されるようになる。1901年に文山深坑，十五份，桃園亀山楓樹坑などを拠点に「茶樹栽培試験所」が設立されている。1903年には桃園の草湳坡（現在の埔心）に「機械製茶試験所」，「茶樹栽培試験場」が設立される。同時に苗栗三叉河という地区で，茶樹の改良，育種，烏龍茶の製造法の改良と紅茶製造の研究などが行われている。人材養成については，「中央農業研究所」(5)に付属する形で「平鎮茶業試験支所」が設置されている。また，新荘林口にも「茶業伝習所」が設立されている。これらは，主として茶業人材の養成及び機械製茶の技術を開発することを業務内容としている。当時，台北帝国大学（現在の台湾大学）理農科の教授の山本亮は茶産業を研究しており，彼をリーダーとして茶業技術人員の教育が実施されていた。

さらに1912年になると，伝統的な茶売買の方式を改良し，茶葉品質を高めるために「台湾総督府茶検査所」が設立され，『台湾茶検査所第一年年報』が刊行された。この年報は５章に分けられ，詳しく茶業に関する検査の作業を説明している。

台湾における茶産業の商業団体である茶業公会，共同販売所も設置された。1898年６月１日に，「台北茶商公会」（以前は茶郊永和興という組織であった）が成立された。その後1912年１月31日には，『台湾茶業月報―第一号』が発行される。同月報は漢文と日本語により刊行された。1914年には，「同業組合台北茶商公会」が発足した。1917年に刊行された『台湾之茶業』は，日本占領期最大の茶に関する雑誌であった。台湾日日新報1923年８月13日の記事によると，製茶取引の改善と品質向上のため，1923年６月10日から「台湾茶共同販売所」が正式に営業を始めたことがわかる。この半官半民の組織である共同販売所は，その重要な役員が総督府により任命されており，その取引量は全台湾製茶葉の三分の

一に達していた。

このような日本占領期台湾の茶産業は，主に日本茶企業によって推進されていた。1900年，日商三井物産と沢野会社は自社による茶園を開発し，加工し輸出することにより市場を独占する状況になった。この状況下で，三井会社は１万７千甲の土地を茶園として所有していた。また，台湾托植会社は１千甲[6]の土地を所有していた。

1901(明治34)年に成立した「臨時台湾旧慣調査会」の第二部を担当する持地六三郎委員が主導した『調査経済資料報告』は最も正式な調査書である。本報告書は1905(明治38)年３月31日に刊行された。うち「茶」の調査は第一編・第二に属し，23節にわけられている。内容としては台湾のお茶の起源から，種類，栽培，各種類茶葉の製造，包装，販売状況，茶業経済など，お茶を経済商品として全般的な調査書である。系統的に台湾茶を研究した最初の専門書であり，日本人が台湾茶を論じる場合には同報告書が引用されることが多い。

日本占領期の台湾茶研究についての重要な研究者としては，日本人の井上房邦も挙げられる。井上は1911(明治44)年から1929(昭和４)年まで茶業改良場に務めており，また1930(昭和５)年から1937(昭和12)年まで平鎮茶葉試験所の技師として茶葉伝習所に務めていた。彼の代表作は『臺湾茶樹栽培学』である。これは17章にわかれており，気候，土質，茶樹の品種，繁殖法，茶種の産地など全方面から茶樹について論じた専門書である。他に台湾茶についての論文も発表しており，「臺湾茶樹の品種」という論文は日治時期の茶学雑誌『臺湾日據時期茶業文獻論集』に収録されている。井上の調査成果は当時の「臨時台湾旧慣調査会」が行った調査より詳細であり，内容としての完成度は高いと評価されているため，井上は日本占領期の台湾茶業科学に相当な貢献をしたと思われる。

以上整理したように，日本占領期の台湾茶は経済産品として重視されていた。当時のお茶に関する研究，調査は農業，商業の分野について多く見られる。では，文化的な「お茶」はどのように存在していたのか。

以下では，この問題点について考察を続けよう。

（２）日本占領期の台湾における茶道・茶文化の発展状況

台湾はもともと中国福建省からの移民が多く，もともと中国茶文化を受け継いでいる。そのため日本占領期に異文化間が接触したことでどのような変化が起きたのか，そしてその後どのように発展したのかを考察する必要性があると考えられる。当該時期の茶文化については，現在の台湾茶文化を論じる本や刊行物ではあまり言及されていないので，当時の新聞記事を分析して茶文化の発展状態を把握することを試みる。

調査した限りでは，茶文化に関する記事について，1908年の台湾日日新報の記事が最も古いものである。これは，記者が茶道の宗匠を訪ねた記事である。

> 「茶道活花の指南として臺北城内で有名な大谷春甫翁を府中街の自宅に訪ふ，翁は長州藩士，歯約六十，痩驅短身，茶縞銘仙の袷に黒木綿の袴を穿ち端然として虎の皮に座する處，人をしてそぞろに當年の面影を偲はしむ。
>
> ハア，私も維新前は諸先輩の驥尾に附して多少国事に奔走したこともありますが，明治九年から後は，一切世事を擲って斯道てこそ茶道に適へりなどと得々たるものがある。これらは吾が所謂茶道にあらずして無茶道ぢや，ハ，，，。（「茶道宗匠の気焔」『台湾日日新報』1908（明治41）年４月12日）

この文中には，台湾に住んでいる茶人の姿や彼らが茶道に対して抱いていた考えが記載されている。この茶人が茶道において有名であったという点からすると，当時台湾における茶道文化は既にかなり発展していたのではないかと考えられる。つまり，茶道が台湾に伝わった時期は1908年よりずっと前，おそらく日本占領期の初期とほぼ一緒であると考

えられる。

その後，台湾では茶道流派が計画的に発展した。以下の２つの新聞記事の下線部には，茶道流派が伝来する経緯と当時の流派数が明らかにされている。まず，次の記事には，大谷春甫という茶人の背景が記載されている。

> 茶道珠光流，生花遠州流より出て別に位一流を案出し鳳囀流の家元となりたる大谷春甫氏は長州侯の落胤とかにて幼年より珠光流の茶道を修め居たるが臺北え来りしり専ら斯道を研究練磨し數十の門人おり（中略）珠光流の茶道も廢れたれば大徳寺にては各國の末寺に令して取調べたるに今は臺湾の大谷春甫氏一人のみなりしにより奇特の事なり（中略）一昨日府前街本願寺に呈茶を催し竝に鳳囀流生花の展覧會を催した，，，。（『台湾日日新報』1909（明治42）年８月17日）

また，次の記事は臺北（通称では台北）市内の諸流派について述べたものである。

> 臺北市内に九人の先生が御座る表千家流三，松尾流一，久田流三，速見流一，臺湾産の珠光流一夫れで有る然し是等の流儀の差異を見ると點前の差こそあれ大體に於て一致して居る無論真髄とする所は禅味を帯びた悟道にわるもの，，，。（「臺北の茶道界」『台湾日日新報』1912（明治45）年３月24日）

以上の資料では，1912年頃に発展していた流派の数目を確認することができる。この記事の執筆者は諸流派の作法について，「ただ古人をまねし，旧規を墨守している」という批判を行っている。あくまで個人的な意見ではあるが，当時の流派はその作法を台湾の風俗に合わせることなく，完全に日本式として行われていたことが推測できるだろう。

また当時の茶文化が，臺北という一地域に活動が限定されていたこと

も指摘できる。政府の中心は臺北にあり，官員，文人，知識人なども臺北を中心として活動していた。そのため伝統的には文人が飲茶習慣を有していたため，日本の流派も主に臺北を拠点に発展していった。記事に記載されている地区，たとえば「東門」,「北門」などは，総督府に近くにある駅（現在の台北駅）の周辺の地区である。当時でも現在でも臺北市の中心地である。

日本占領政府の総督が茶話会を催したとの記事がある。例えば，譲山総督は，10月24日に東門街にある総督官邸にて全臺詩人茶話会を開催した。その茶話会の参加者は，詩人，詩社団体などであった（「總督官邸に於ける全臺詩人の茶話會」『臺湾時報』1921（大正10）年11月号）。また，伊澤総督が開催した晩餐會および茶話會では，日本人の官員と台湾の茶人，詩人との交流があったことがわかる（『臺湾時報』1924（大正13）年10月号）。

次の記事には，速水流の總務所が設立されたことが記載されている。

> 京都茶道速水流直門三宅閑月女史は今回臺湾に於ける速水流宗家代理となつたので臺北市北門町一〇三〇間女史宅に臺湾総務所を□いて臺湾に於ける速水流茶道事務を總轄する事となつた,,,。（「茶道速水流の總務所設置」『台湾日日新報』1931（昭和６）年３月19日）

前述の1912年の台湾日日新報の記事には，臺北茶道界の９流派中に速水流の名はなかったが，20年後臺北に總務所が設置されたことになる。日本茶道の流派の台湾における発展は中断することはなく，隆盛し続けたことがうかがえる。

日本占領期には，日本側から日本茶道の作法，流派，思想などが台湾側に伝えられた。つまり台湾は基本的に受け入れる立場を取っていた。日本茶道が中華文化である中国（大陸）から伝来し成立したものであることを鑑みると，日治時期の状況は逆輸入と言えるだろう。統治者と被統治者という立場の違いは逆輸入という状況になった原因の一つであろ

う。以下で取り上げる新聞記事においては，明らかに日本側から台湾側へ「日本的な茶文化」，特に茶道が伝えられていったことがわかる。この記事は，茶道，花道などの芸能活動が当時の上流階級の間で盛んであったことを記している。

> 上流の男子もやる□近頃種々の娯楽の普及を見るが生花に次いでの流行は茶の湯で有る然し花と茶とは離る可からざる関係を持つて居るから双方之を兼ねてやるものが多い，，。（「臺北の茶道界」『台湾日日新報』1912（明治45）年３月24日）

以下では，記事のタイトルを適宜取り上げることで，簡潔にまとめることにしよう。

①「茶禅同一味を味わふー支那茶道の常禮―精進料理後の茶の甘味さ」『台湾日日新報』1927（昭和２）年１月７日

この記事の執筆者である後藤朝太郎は，中国で接触した日常のお茶と日本の茶文化の違いを述べている。そしてこの文章は台湾の日系新聞に刊行されている。台，日，中の三つの地域の茶文化情報はこのような形で流通していた。

②「茶境」『臺湾時報』1934（昭和９）年７月号

署名は「六合庵」とある。内容としては千利休の茶の精神を伝えている。1934年の時点で日本の台湾占領はほぼ40年にわたっている。内地延長主義[7]の時期を経て日本語を読める人も少なくないと考えられる。したがって，本文章の読み手には台湾人も含まれよう。この様に文字を通じた台湾の茶文化への影響もなかったとはいえないのであろう。

③「お茶と茶道」『台湾日日新報』1938（昭和13）年２月17日，２月18日

お茶と茶道というテーマで二日間連載されている。注目すべきは，作者が医学博士という背景をもっていることである。医学の視点から中国宋代の詩文を引用し，日本の茶道のことも論じている。過去とは異なり，流儀，思想など文化的なことを紹介するだけではなく，日本と台湾のお茶と医学の概念を結びつけた多元的発展であるといえよう。

④「日常生活と茶道精神」『台湾日日新報』1939(昭和14)年３月９日，11日,12日,14日（一から四まで連載）

作者は茶道石州流第八世の拓植曹谿である。「食礼」,「物と心」,「主客一如」,「調和」という四つのテーマにわけて，彼が考えている茶道が何であるかを述べている。

⑤「簡素な茶道―日本文化史と我等の生活」『台湾日日新報』1940（昭和15年）２月４日

主として日本の文化として代表できる出来事を取り上げて述べている。そのうち茶道は一つの重点として読者に紹介されている。ほかには武技，貿易，工芸，美術などが述べられている。

（３）台湾における茶道の衰退

日本茶文化は，たとえば茶道具の使用，茶道精神の浸透といった点で，台湾の茶文化に深く影響し，台湾の茶文化の一部になったともいえる。しかしながら完全に流派を継承することはなく，日本占領期の終了にともない衰退していった。以下の記事によれば，原因としては台湾の建築風俗のもとで茶室を造るのが難しいという点，また茶道の師匠があまりに経済的な利益を求めるために伝承の妨げとなっているといった点が指摘されている。

臺北廳の建築規則の厲行は斯界に取っての一打撃であつて茶席を造

る事が出来ぬのが即ち茶道らしい茶道を習ふ事の出来ぬ一大原因である，（中略），従て茶道の型を學える人が有つても茶道を活用させる人が無いのは甚だ残念で有る。
悪弊がある。臺北には茶席一つも無いと同時に師匠であって會席料理の方法を教授する師匠は先づ無いと云った方が確かだ斯かる次第で師匠は例の師匠癖を現はして傳授ものとなるとヤレ傳授するから金を出せの盆立を教へるから金を出せのと此の調子で行くと皆傳迄に千圓位の金は無くなって終ふだらう或者の如き一つの傳授を受ける為めに三十圓とか四十圓とか取られたと云う事で有る月謝を拂て居る上で此の科料ではやり切れたものじゃ無い内地に於ても左様であるが殊に臺北の如き此の種の悪弊が多い様だ，，，。（「臺北の茶道界」『台湾日日新報』1912（明治45）年３月24日）

４．茶道と茶芸の日台比較――茶道具と茶事の思想から

本節では，以上の日本占領期の茶文化交流を踏まえて，比較文化の観点から分析する。お茶を文化的に理解する場合，具体的な形（道具）と抽象的な思想（精神）を合わせて考察することが有効である。両者が組み合わされたところに，儀式（作法）がある。以下では，まず台湾で用いられるようになった茶道具における日本からの影響と改良を，続いて台湾の代表的茶人の思想における茶道の影響を考察する。

（１）日台茶道具比較――日本式茶器の影響

日本占領期は，日本式の茶道具を輸入する方が中国から輸入するよりも容易であった。そのため，一般的な民衆はだんだんと日本茶器を受け入れるようになった。その結果として，それまでの「中国式」の茶芸や茶文化で用いられてきた茶道具と「日本式」の茶道で用いられた茶道具とが影響しあい，現在台湾で用いられる茶道具が形成された。日本占領期の影響の仕方によって，①改良タイプ，②導入タイプ，③導入後に機

能転換したタイプの三つに分類することができる。それぞれ代表的な例をあげて説明しよう。

①改良タイプ

改良タイプは，すでに台湾や中国の茶文化でも存在した道具に日本式の要素を取り入れて改良された道具である。土瓶（写真ａ）は中国式にもあった道具だが，中国式の伝統的な土瓶の「つる」の部分は２種類存在する。同じ素材で作られ，つるが胴部と一体となっているタイプと，つるの素材が金属のタイプである。この中で，日本のように持ち手が竹，藤などで作られるものは日本占領時代から使用されるようになった。湯呑（写真ｂ）も改良タイプに属する。一番左は中国伝統的な湯呑であり，小さくて口も狭いタイプである。真ん中のものは茶道において使われる茶碗だが，大きくて口は広げている特徴がある。そして右のものは，このような日本茶道の茶碗の要素を取り入れて改良した「日本杯」というものである。

写真ａ

土瓶

写真ｂ

湯呑

茶碗

日本杯

②導入タイプ

導入タイプというのは，中国式にはそもそもなかったが，日本の影響で利用されることになった道具である。例えば日本式の茶道具の急須であるが，導入してまた改良させる場合も見られる。写真ｃの「飛天急須」は，持ちやすいように改良されたものである。写真ｄの風炉と釜は，もともと日本式の道具であったが，優れた形として台湾の茶人にも受け入れられた。

③導入後に機能転換したタイプ

以上に加えて，中国式には存在してこなかった道具のうち，台湾の茶文化に導入された後で，日本茶道での本来の機能とは異なった用途に用いられるに至った茶道具も存在する。懐紙は，もともと日本式ではお客がお皿の代わりとして使ったり，指を清めたりするための道具であったが，台湾に伝わった後，主人が茶道具を清めるものとしても使われるようになっている。台湾では一般的に「茶紙」と呼ばれている。中国古代文献の中には茶紙というものがなかったし，茶紙の素材は懐紙とほぼ一緒なので，日本から伝来してきたものだと考えられる。

（２）茶道文化の交流と影響

続いて，茶道文化が伝来したことで，台湾の茶文化における思想にどのような影響があったかを考察しよう。ここでは，台湾北部茶界の代表

写真ｃ

急須（改良）飛天

写真ｄ

風炉と釜

者の魏清徳を中心に論じる。

台北日報の編集を務めている魏は，茶文化の推進に大きな功績を残した。一つは茶に関する文芸創作の点である。彼は宋代詩人陶淵明の「飲酒詩二十首」の形式を引用し，「飲茶詩二十首」を作った。「飲茶詩」には広範な内容があり，中国古典文学から台湾の烏龍茶文化までさまざまな内容が含まれている点が評価されている。彼はさらに，古典漢文形式で茶事を描いた短篇小説二篇を残した。茶文化に関する小説創作はほとんどなかったため魏の作品は茶を題材とした小説の先駆であると考えられる。

魏が北部の代表茶人であるのに対して，台湾南部の代表的茶人は連横である。連は台湾伝統の工夫茶の代表的人物でもある。彼の主張によると，台湾の人民は主として彰（現在福建省東部に位置する），泉（現在福建省東南部にある），潮（現在広東省東部に位置する）などの地域からの移民であるため，台湾の茶俗は間違いなく中国内陸とは異なるとされる。したがって，彼は，福建を起源とする工夫茶が台湾の茶文化を代表するものだと考えている。彼は江南から伝来した工夫茶術に基づいたうえで，個人の経験，見解を加えて台湾の工夫茶術を構築した。たとえば，茶葉の使用について，お茶の風味，茶人と庶民的なお茶を区別するため「茶人にふさわしい」ものなどから考えると武夷茶しか飲まないことを堅持しているようである。そして名道具を使用することも重要である。彼の作品『剣花室外集』は，「茶」の茶詩によって，具体的に茶道具に対する要求を描いている。

> 「若深小盞孟臣壺。更有哥盤仔細舖。破得功夫瀹茗。一杯風味勝醍醐。」（若深という小型の杯，孟臣という壺，哥盤という茶盤を使ってお茶を入れると絶佳なる風味が現れる。）（張 1999：109）

この詩句では若深，孟臣壺，哥盤[8]という工夫茶で使用する茶器に言及している。端的にまとめると，連は伝統的な工夫茶を維持することに

重きを置いており，日本占領期にもかかわらず大きな変化を見せなかった。これに対して，日本占領政府が置かれ，日本人との交流が盛んであった台湾北部の臺北を中心に活躍した魏清徳は，取り上げて論じる価値があると思われる。

魏は当時の政府官員，文人との間に頻繁な往来があり，日本人の文人との交流も盛んであった。このような交流のなかで，魏は当時の主流であった中国式の「工夫茶」とは異なる独自の作法を創出するに至った。すなわち，彼の茶芸間には日本側から受けた影響が見られるのである。魏が考案した作法は潤庵茶芸という[9]。

次の詩的な文章は，魏が茶事を描いたものである（張 1999:121）。

> 蕭齋畫靜柳飛棉，漠漠春陰啼鶗鴦，呼兒淨掃案頭几，晨夕香花勤羅列，別有茶器極玲瓏，陽羨無比真透徹。我家藏有烏龍茶，竹爐活火湯花熱，潑取一杯煩惱除，二杯酒後更絕佳，三杯四杯滌俗塵，五杯六杯勵清節。人生但求快意足，何用珊瑚與金玦，茅廬待築松林間，汲貯山泉浸寒冽，小窗作誦先生詩，字字梅花香裡齧。
>
> （訳：書画が飾ってある書斎に小鳥が囀るのが聞こえる。童僕[10]を呼んで清掃させて，お花を飾っておこう。陽羨茶の茶色が玲瓏たる茶器に映っているのを翫賞している。珍蔵する烏龍茶を竹炉で煎じるお茶は一杯喫すれば悩みがなくなる。お酒を飲んだ後二杯お茶を飲むと風味が高まるだろう。三杯，四杯で精神的にも清浄されることになる。五杯，六杯飲めば人品，風格も備わるだろう。貴重な道具を使わなくても，素朴な環境にいても，詩句を詠んだり，人生を品味したりという単純なことで満足できるだろう。）

これを題材として，茶道と比較しながら，台湾と日本の茶文化が融和した結果，どの様に魏のような台湾茶人の茶芸思想に反映されたのかを明らかにしたい。

まず，魏が触れている茶葉の種類について考察しよう。彼は，台湾烏龍茶を茗茶として使用した，当時の台湾茶芸史上初めての人であった。伝統的に台湾の茶人は，武夷茶，すなわち福建から輸入した茗茶を喫する。それは歴史条件，地理位置などの要素とも関係している。当時の台湾茶文化の主流であった林鶴年，連横以来の工夫茶では，茗茶といえば武夷茶のことであった。連横の考えでは，台湾烏龍茶はおいしくても鑑賞に値する等級にはなれないという評価であった。

しかし逆に，魏は台湾烏龍茶を愛用している。ここで，彼が台湾烏龍茶について描いた「飲茶詩之三」という別の詩句をとりあげたい(11)。

故人別我久，兩地各含情，清晨誰剝啄，投刺得其名，遺我烏龍茶。
開誠清風生，呼兒汲澗水，下有潛龍驚。一碗淺孤悶，二碗新詩成。

（訳：久しぶりの旧友から烏龍茶を貰い，山泉で煎じる。一煎目は孤独を解消し，二煎目で詩作を行う。）

この詩句では台湾烏龍茶のことに言及するだけではなく，その優れた風味も描いているため，魏は確かに台湾烏龍茶を茗品として扱っていることがわかる。

先の詩句に戻ると，その中で魏は「陽羨茶」についても言及している。「陽羨茶」は，「紫笋茶」（浙江省湖州），「蒙頂茶」（四川省雅安）と並んで，唐代三大茶といわれ，現在の江蘇省宜興一帯で産するお茶である。現在では，「陽羨雪芽」という名で生産されている。

以上をまとめると，同時代の武夷茗茶を賞賛している風潮に対して，魏は台湾烏龍茶を愛用し，また唐代陸羽から受け継がれてきた陽羨茶を飲んだ。このように，魏はどのような茶葉を用いるかは，彼の茶芸にとってそれほど重要ではないと考えている。

続いて，魏が茶器について触れている点を考察しよう。端的に言って，彼は日本式から導入された茶器や，中国の様々なスタイルの茶器を用い

ており，茶器が茶文化の決定的な要素であるとは考えていない。例えば彼が茶杯を描いている句「別有茶器極玲瓏，陽羨無比真透徹」の中で，「玲瓏」，「透徹」という言葉からは，清代のスタイルである「青華（花）米透（杯に透明な米粒の形が彫られている特徴）」という茶具が推論できる。また，魏の他の詩句のタイトルである「謝兒山櫻井先生惠賜茶器及觀音達摩二尊」において，日本式の茶道具も使用していたことが確認できる。さらに竹炉，鉄瓶などの使用は伝統の作法に従っている。

魏の茶泉（お茶をたてるための水）や茶術（お茶をたてる作法）は，伝統的なものである。「汲貯山泉浸寒冽」，「呼兒汲澗水」と描かれているように伝統的な作法に従って山泉を使用し，「竹爐活火湯花熱」（竹炉で火をつけ，水を沸かさせる）という伝統の作法で操作している。

以上を総合して考察すると，魏の思想は「茶をたてるための徳は禅の境地である」という日本茶道の理想と共通している。日本の茶文化も中国から伝来し，中国の思想を受け継いでいるが，日本の独特な文化が融和して成立した茶道では禅の思想が特に重視されている。千利休が主張したわび茶に至り，その禅の思想が完全に茶道に融和し，一体となった。

そのような茶道に対し，台湾の茶文化は工夫茶の発展以来だんだんと茶道具，茗茶を重視する傾向が強くなってきた。杯は深甌[12]，壺は孟臣，茶は武夷という考えが起こり，名器，名茶の価格が非常に高騰する傾向があった。

このような傾向のもとで魏が茶徳を強調していることは，彼自身の理念に加えて日本文化との接触に関係があるであろう。彼は茶と徳の関係を強調している。「吾謂飲茶者，其徳正不回。」（私が考えている茶人は立派な徳性を持っている人である。）ここでの立派な特性とは，道徳意識，礼儀法則を重視するということだろう。

これは，日本茶道の精神ともいえる千利休の唱えた「和敬清寂」の四字の中にも要約されている。千宗室が茶道の精神を論じるときも，同じく徳性のことを言及している。彼はお茶を学ぶにあたって重視しなけれ

ばならないのは礼儀の問題であると述べた。「この礼儀はなにも茶道だけではなくて，あなた方が一個の社会人として生きていくときに必要な節度，守らなければならない正しい，また当然の行ないなのです。（中略）この礼儀を簡単，明瞭，順序正しく修得するのが茶道です。（千 1974：12）」

このように並べると魏の思想も日本茶道も，人が守るべき規律をお茶を通じて実践することと考えている点で共通する。いいかえば人間としての準則が自然に茶の湯の中に存在していると考えている。そのような魏の茶芸思想における禅，道の精神は以下の句にも見られる。一つ目は前述した「人生但求快意足，何用珊瑚與金玦」（珊瑚，金，玉など貴重な素材で作った茶具を使わなくてもお茶の心が持てば自足，快適な人生を求めることができる）という句である。二つめは「達人遊物外，無求為最貴，畢生只飲茶，舌根辨真味。」（人生において飲茶以外を追求することはない。舌で真実の味を弁別することができる。味というのは茶湯の味であり，人生の真意ということも指している）という句である。

この考えは，やはり利休七則と重なるものである。利休七則の第一則では「茶は服のよきように点て」という。言葉自体としてはお茶というものは，おいしいように点てよというものである。千宗室はそれに対してつぎのように解釈している。「ただ高価なお茶をだしておけばお客は喜んで帰るだろうという気持ちでお茶を点てたとしたら，果たしてそのお客は，それで満足できたのだろうということを考えてごらんなさい。物質的な，舌で感じる味覚の満足だけでは足りないのであって，もっと精神的な亭主と客の心と心が本当に通じ合えるということこそ，大切なことだと利休は言っているのです。（千 1974：17）」前者は個人の人生に対する体験，後者は貴重な物質より主と客という人間の要素を重視することを言っている。個人であっても主と客の関係であっても物質を超えて精神的な境地を追求する点が共通していると言えよう。

魏の茶芸思想は，当時の，工夫茶を主流とし，技術，物質を重視している時代にあって非常に特例であったと考えられる。

５．まとめ

時間的・空間的に視野を広く取るならば，茶文化というのは広い分野である。本稿では，いままで東アジアの茶文化を論じる場合，日本，中国，台湾における茶文化がそれぞれ独立な文化体系として扱われる傾向が強かった点を問題視した。

本稿第２節では，本論の背景と主たる比較文化の観点を提示した。茶は当初は薬と飲み物として使われたが，唐代までに精神的なレベルに進化し，そしてそのように精神化した茶文化が日本に伝えてられた。日本の茶文化は，この唐代に伝来した基礎からだんだん発展し，それ以上のレベルへと精緻化しつづけ，千利休の時代に大成したと考えられる。そしてその上で，日本占領期に台湾に影響を与えたのである。台湾の茶文化は中国のルーツを貫き，薬用と飲用時代の日常性を持ちながら，茶道の精神を受け，新しい茶文化を展開していった。

第３節では，当時茶産業の情況を把握しながらさらにお茶に関する文化的な発展を解明した。そして第４節では，茶道具の受容と茶事に現れた思想という二つの面から，茶文化が日本と台湾の間でいかに交流，影響されてきたのかを明らかにした。

台湾茶芸は，独特な創造性と同時に，茶道の要素を多く含むものとなっている。茶道と茶芸の文化的共通性が否定できないことを鑑みれば，いままで異文化として研究された東アジアの茶文化について，比較の視点からより深みをもった研究を行うべきであろう。

注

（１）これが日本の「団茶」に影響を与えた。

（２）これが日本「煎茶」に影響を与えた。

（３）もともと明から清代の福建省で生まれた作法である。特徴としては，半発酵茶である烏龍茶を淹れる手法（江南茶と異なり，「下投法」しか使用しない。）そして小さい壺を使用すること。そのため，烏龍茶

（青茶）以外を淹れるのには適さないが，現在では烏龍茶以外でも工夫茶の手順で淹れる者が多い。たとえば，張（2002）では工夫茶には4種類があると記載されている。僧道工夫茶術，富商工夫茶術，茶人工夫茶術，老人茶術という。

（4）西山（1962）によれば，平安時代にすでに「歌仙正統」の御子左家が登場しているし，雅楽に関しては奈良時代に家芸として確立していた例も知られている。

（5）確信できる資料が見つからないが『台湾総督府中央農業研究所農業部彙報1号』が大正11(1922)年に提出されていることを考えると成立はこの時期であろう。

（6）甲。台湾固有の面積の単位である。日本占領時代の「台湾土地調査規則（明治律令第14号）」において1丈3尺を1戈として，1辺25（325尺）戈の正方形の面積は1甲と定義されている。＝9699.26538㎡

（7）内地延長主義時期：(1915～1937）1919に台湾総督に就任した田健治郎は初めての文官総統であり，また田は赴任する前に当時首相であった原敬と協議し，台湾での同化政策の推進が基本方針と確認され，就任した10月にその方針が発表された。田は同化政策とは内地延長主義であり，台湾民衆を完全な日本国民とし，皇室に忠誠な国民とするための教化と国家国民としての観念を涵養するものと述べている。

（8）宗代の哥窯から制作されたおぼん，あるいは宋代製品を摸造したものを指している。

（9）張（1999)。潤庵とは，魏清徳の字である。魏自身は，自らが考案した茶の作法を「潤庵茶芸」と称したが，これは「潤庵の考案したお茶の作法」という程度の意味で，台湾の茶文化の総称として「茶芸」が専門用語にしたのは1970年代になってからのことである。

(10) 兒。息子，あるいは童僕の意味もする。童僕は茶人のかわりに茶事を用意するという伝統風俗により童僕という翻訳を採用する。

(11) 魏の2つの詩句では，ともに唐代詩人の盧仝の「走筆謝孟諫議寄新

茶」という詩句の構造が採用されている。

(12) 若深甌，孟臣壺は工夫茶四宝に属する。

参考文献

日本語文献：

大岡信（1975)『岡倉天心』朝日新聞社

岡倉天心（1983)『茶の本』桶谷秀昭訳，平凡社

岡倉天心（1998)『茶の本』浅野晃訳，講談社

唐木順三（1958)『千利休』筑摩書房

熊倉功夫（1978)『近代茶道史の研究１』日本放送出版協会

熊倉功夫（1990)『茶の湯の歴史　千利休まで』朝日新聞社

熊倉功夫，田中秀隆（1999)『茶道文化論』淡交社

桑田忠親（1976)『千利休研究』東京堂出版

斎藤隆三（1974)『岡倉天心』吉川弘文館

千宗室（1983)『茶経と我が国茶道の歴史的意義』淡交社

千宗室（2001a)『海外の茶道―茶道学大系』淡交社

千宗室（2001b)『茶事・茶会―茶道学大系』淡交社

高橋忠彦（2000a)『東洋の茶―茶道学大系』「中国茶文化研究の歴史と諸問題」淡交社

高橋忠彦（2000b)『東洋の茶―茶道学大系』「資料・中国茶研究文献目録」

立木智子（1998)『岡倉天心茶の本鑑賞』淡交社

田中秀隆（2007)『近代茶道史の歴史社会学』思文閣

谷端昭夫（1999)『茶道の歴史』淡交社

西山松之助（1962)『現代の家元』弘文堂

津城寛文（1995)『日本の深層文化序説―三つの深層と宗教』玉川大学出版部

久松真一，藤吉慈海（1987)『茶道の哲学』講談社

堀岡弥寿子（1974)『岡倉天心：アジア文化宜揚の先駆者』吉川弘文館

堀岡弥寿子（1982）『岡倉天心考』吉川弘文館

中国語文献：
范増平（1992）『台湾茶業発展史』台北市茶商業同業公会
范増平（2002）『茶芸学』萬巻楼図書股份有限公司
台湾中華茶文化協会（1992）『第二届国際茶文化研討会論文選集』碧山岩出版社
林易山（2006）『茶心 茶道禮儀藝術之創作』
陳椽（1993）『中国茶葉外銷史』碧山岩出版社
張明雄（1994）『台湾・茶文化之旅』前衛出版社
張宏庸（2002）『台湾茶芸発展史』晨星出版社
張宏庸（1999）『台湾伝統茶芸文化』漢光文化
蔡栄章（2000）『茶学概論』 中華国際無我茶会普及協会
蔡栄章（2005）『説茶之陸羽茶道 』北京燕山出版社
賴正南，蘇雅惠（2004）「三十年來茶藝文化發展對社會及茶產業之影響及展望」『臺灣茶業研究彙報』23号

新聞：
『臺灣日日新報』
1908年４月12日 「茶道宗匠の気焔」
1909年８月17日
1912年３月24日 「臺北の茶道界」
1927年１月７日 「茶禅同一味を味わふー支那茶道の常禮―精進料理後の茶の甘味さ」
1931年３月19日 「茶道速水流の總務所設置」
1938年２月17日 「お茶と茶道―上」
1938年２月18日 「お茶と茶道―下」
1939年３月９日,11日,12日,14日 「日常生活と茶道精神一～四」

1940年２月４日　「簡素な茶道―日本文化史と我等の生活」
『台灣時報』
1921年11月号　「總督官邸に於ける全臺詩人の茶話會」
1924年10月号　「總督官邸の茶話會」
1934年７月号　「茶境」

【キーワード】Sado, Chagei, Tea utensils

Comparing Tea Cultures in East Asia: The Influence and Interchange between Japan and Taiwan

Ke Yi-hsun

The goal of this research is to reconsider the image of East Asian tea culture by comparing tea cultures of Japan and Taiwan. The tea cultures in these two countries have been researched as different culture systems, but a further inquiry reveals that they have had strong relationship in many ways.

The ceremonial tea culture is originated from China, but it has developed differently in Japan and Taiwan. On the one hand, Japan has established the systematized tea ceremony, which is now well known as "Sado." On the other, Taiwan is now yet consolidating its tea ceremony, "Chagei", with much historical influence from the continent China and from the tea industry promotion during the Japanese occupation period. Consequently, the systematic research of the latter is still at the beginning.

The structure of argument is as follows. First, the historical interrelation of tea cultures between Japan and Taiwan is briefly described. Then, the tea industry and tea activities in Taiwan during the Japanese occupation period will be analyzed through periodical documents. At last, the tea utensils in two countries are compared. Tea utensils of two countries illustrate the import, partial influence, and transformation of tea culture from Japan to Taiwan.